



**広告** [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

**広告** 講演内容がWebで!! 『内部統制とITフォーラム』ITの果たす役割とは? NIKKEI

**広告** 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

**広告** ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減ー富士通

ビジネス: ネット時評(日経デジタルコアより)

更新: 4月16日 07:00

## 「シャッキシャンとナカタナカタ」ーモロッコを旅して(中村伊知哉)

フェズという町にいる。モロッコである。9世紀のイスラムの都だ。人ひとりがやっ行き来できる路地の市場が網の目のように広がる。陶器や糸の店。鼻をつくナマ皮のニオイとミントの香り。せわしげに働く女たち子供たち口バたちと、うつろにうづくまる失業者たち。フランス語の笑い声とアラビア語の怒声。突如あらわれ通り抜けるパーカッションの楽隊。



### ■まるでインターネット

千年前からとうとうと流れる営みがある。仕事と暮らしとコミュニケーションがあふれる。しかもこの迷路、どこが入り口でどこが出口なのか。どこがどうつながっているのか。いま自分がどこにいるのか。歩いても歩いても見当がつかない。このラビリンスはまるでインターネットのようだ。

路地にある保育園に入ってみる。小さな子供たちが私をつかまえて、シャッキシャン、シャッキシャンと呼ぶ。アラビア語かな。なんだろう。路地を歩いていても、幼い子はみなシャッキシャンと言って喜ぶ。あ、わかった。ジャッキー・チェンのフランス読みだ。香港人の映画パワーは北アフリカにも達しているのだな。

ところが、ティーン・エイジャーや20代の男の子たちは、私が通るたび「ナカタナカタ」と呼びかけてくる。ほう、日本がイタリアに輸出したソフトの名前はここまで響いているのか。シャッキシャンとナカタナカタ。ツクツクボウシとヒグラシの鳴き声のようだ。そのいずれも私とは似ても似つかぬ美男子だが、アジアがカッコイイものとして受け入れられている、その恩恵を少し頂戴し、ありがたい限りである。

### ■タダで60チャンネル

路地を抜け出す。丘を登って下界を見ると、どの家にもパラボラがある。地元の人言う。「アラブの番組も、フランスもイタリアもスペインも、CNNもスカイも、ぜんぶ見られる。60チャンネルはあるよ。20ドル」

それでシャッキシャンもナカタナカタも有名なのだ。だが月20ドルは結構な負担だな。「違うよ、パラボラのセットが20ドルで売ってるんだよ。番組はタダだよ」タダで60チャンネルか。では日本よりずっと情報大国ではないか。携帯電話を持っている人も多いし、ダイヤルアップは遅いけど使えるし。

路地に戻る。菓子や雑誌の売店はみな、ポケモンのグッズを置いている。にせピカチュウの絵が飾ってある。これぞニッポン最強の輸出品だ。おじさんはピカチュウの国から来たのだよ。だが、幼い子たちは誰も本気にしない。ピカチュウはモロッコのものだからだ。シャッキシャンもナカタナカタもお客様だが、ピカチュウは格が違う。すっかり帰化している。完璧に溶け込んでいる。これぞ勝者だ。

先日、サウジアラビアのイスラム法の最高権威者がポケモン禁止ファトワ(宗教令)を発令したと聞いた。影響力が

大きすぎるからだろう。イスラムを脅かすピカチュウ。タダの衛星とダイヤルアップがある国々で、ファトワの実効力はどの程度あるのだろう。

## ■ピカチュウの文化貢献

私の住む米国マサチューセッツ州でも、もう2年前にこの問題は起こっていた。小学校がポケモンカードを禁止したのだ。風紀が乱れるというのが理由だったが、大リーグカードやNBAカードはいいのにポケモンがいかんというのは日本文化の弾圧ではないかと学校に対し独り抵抗した私は、近所の子たちからポケモンおじさんとの称号を授かることになる。

結局、学校が禁じたところで信者は地下に潜る。我が家が潜伏先になるのだが、本場ニッポンのカードを持参して彼らが私に頼むのは、カタカナを教えてくださいということだ。カメックスのカの字やニヤースのニの字を教えてください。彼らにとって今、カタカナがカッコイイのである。ニッポンがカッコイイのである。

ある日おもてでオニギリを食べていた。それを見たアメリカ人の子供たちが「クール！」と言ってくれた。どうやらポケモンのテレビでオニギリを食べるシーンがあったらしい。私じしんは別段ポケモンのことを好きではない。だが、こんな状況をもたらした功績には頭を下げたい。

数兆円の国家予算を積んだところで、世界の子供たちにニッポンをカッコイイと思わせるのは至難だ。女王陛下がビートルズに勲章を授けたように、日本政府はピカチュウの文化貢献を讃えるべきだろうと思う。

## ■コミュニティのオープンさと許容度

私の住むボストンを代表する人物は、と問えば、多くのアメリカ人が「小澤征爾」と答える。小澤さんも溶け込んでいる。強烈なパワーとしなやかさで、コミュニティに入り込んで、定着している。ボストンレッドソックスに移籍したとたんノーヒット・ノーランを達成した野茂投手も、そうってくれるかもしれない。かつてパリに溶け込んだロシアのシャガールやスペインのピカソも同じようなものだったのかもしれない。

それは一方、そのコミュニティのオープンさと許容度のなせる技でもある。かつてのパリも今のボストンも、外からのパワーを自らの血肉にしているのだろう。おそらく、これから無数に誕生するネットのコミュニティも、貪欲なオープンさを原動力にしていくのだろう。

路地に夕陽が差してきた。ロバが家路につくようだ。道をあけろという。このラビリンスではロバが優先なのだ。千年かけてできあがった秩序がある。ネットの社会も、落ち着くまでには千年ぐらいかかるのだろうか。

### ー筆者紹介ー

中村 伊知哉(なかむら いちや)  
スタンフォード日本センター研究所長



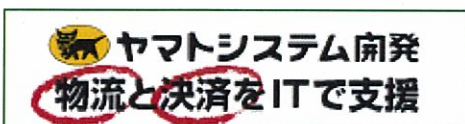
### 略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド「少年ナイフ」のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従

事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット,自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)
- メディア融合時代における「競争」と「公益」の調和・竹中懇最終報告に寄せて(金正勲)
- IT人材不足を解消するためにすべきことは何か(前川徹)
- 利用者の視点からコンテンツ活性化を考える(大木登志枝)
- 「ネットで働ける」社会は本当に来るのか?(田澤由利)
- 携帯電話の「自己触媒的」発達・グローバル市場で強みとなるか(土屋大洋)
- 産業と融合する通信インフラ——ネットワーク社会の新たなアーキテクチャーとは(荒野高志)
- ネットワークは中立的か?——日米の議論の潮流を読む(谷脇 康彦)
- MVNOの第2ステージが始まった(本荘修二)
- 個人情報保護法から1年で見えてきたこと(高木 寛)
- 知らずにインストールされる「アドウェア」(帆場英次)
- ユビキタス、センシング&コンテキスト化のインパクト(碓井聡子)
- 通信・放送融合 タブー廃しチャンスに変えよ(中村伊知哉)
- これでいいんかい、国の委員会<その6>(関根 千佳)
- 少子高齢化時代のICT利活用への期待(片瀬 和子)
- 「Web 2.0」はパスワードか?(湯川 抗)
- 本当にユビキタスな情報社会へ向けて(土屋大洋)
- 個人情報保護法と暗号(内田勝也)
- 到来した「超」カスタマー・セントリックな時代(江川 央)



NIKKEI NET

新製品

- [パソコン関連](#)
- [ソフト&サービス](#)
- [自動車](#)
- [AV&通信](#)
- [生活](#)
- [ホビー&レジャー](#)

(C) 2006 Nihon Keizai Shimbun, Inc. All rights reserved.